

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 8日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520730

研究課題名（和文） キリスト教英文文書からみた清末民初の広東地域社会

研究課題名（英文） The local community of Guangdong province during the late 19th and early 20th centuries: Through the analysis of English Christian archives

研究代表者

蒲 豊彦 (KABA TOYOHICO)

京都橋大学・文学部・教授

研究者番号：30233919

研究成果の概要（和文）：

中国広東省の汕頭、潮州一帯の地域史を、可能な限り民衆史として再構成した。扱う時期は、明の中期から 1920 年代まで。要点は以下の通りである。(1)宗族をめぐる村落間関係が 1920 年代にも継続していること。(2)1890 年代の中頃から住民による自助運動が盛んになり、その頂点が 1920 年代の農民運動であること。(3)1890 年代の中頃以降にはまた、地域を越えて物事を考える広い視野が、住民の間に出現したこと。

研究成果の概要（英文）：

This study reframes the regional history of Shantou-Chaozhou district in the Guangdong province as a form of people's history. The targeted period is from the middle of the Ming dynasty to the 1920s. The followings are the major points. (1) Community relations which are derived from lineages survived into the 1920s. (2) From the middle of the 1890s self-help movements among the people became visibly active, and they reached full bloom in the peasant movement of the 1920s. (3) The middle of the 1890s is also marked by the appearance of a larger view of the world by which the people could see the big picture beyond the boundaries of the local area.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、東洋史

キーワード：中国近現代史、地域史、キリスト教

1. 研究開始当初の背景

研究の直接の動機は、1920 年代に中国広東省の東部で大発展をとげた農民運動の背景を探ることにあつた。その運動は、開始からわずか 1 年足らずで、少なくとも 20 万人以上の農民を組織することに成功している。そ

のようなことが可能だった要因を理解するために、当該地域の歴史を 1920 年代以前、さらには清末へと遡ってみることにした。

ただし、特定の地域の歴史をある程度詳細に明らかにするのは、一部の大都市を除き、中国では容易ではない。史料がきわめて限ら

れているためである。

中国では社会の上層部やとりわけ支配者層にかんしては、古くから文献が数多く蓄積されてきた。しかし地域や庶民については、史料となるものが少ない。たとえば、日本史研究で使われる各地方の「地方文書(じかたもんじょ)」に相当するようなものも、中国にはほとんど存在しない。近代にいたってようやく、新聞、雑誌その他が現われ、中下層社会についての情報が増大することになる。

そうした新聞等が出現する直前にあって、きわめて注目すべき資料群が存在する。それが宣教師関連文書である。19世紀のなかごろから本格的に中国に入り始めるプロテスタントの宣教師や、またあらためて活動を再開したカトリックの宣教師は、おもに庶民を布教の対象としつつ、ミッション本部への書簡や年次報告の形で大量の文献資料を残した。

それは、19世紀の中ごろから、宣教師が中国を追放される1950年代頃までの約百年間におよび、中国全土にわたって信者をめぐる地域の状況が継続的に記録された。

一例として、広東省東部に入ったイギリス長老会ミッションを取りあげてみよう。この地域は、潮州、汕頭のふたつの町を頂点として、その下位レベルに、揭陽、棉湖、五経富などの市場町が点在する。宣教師はこうした市場町に布教基地を設けると、すくなくともそれ以降は、洗礼者数をはじめとするさまざまな事項を、イギリスのミッション本部へ定期的に報告しつづけた。

それらの情報を整理すると、たとえば1893年末から突如として地域住民が各地で大量に教会に向かいはじめ、またこのころ善堂系の結社および三点会が活動を活発化させたことなどがわかる。さらにそれを漢文史料等と組み合わせると、干ばつによる食料不足、日清戦争、悪疫の流行などが絡みあって、この時期に地域住民が大きく流動しはじめたことがうかがえる。つまり、この地域にとっての王朝崩壊は、まずこのような形で訪れたのである。

揭陽、棉湖、五経富のような下位のレベルの地域について、その状況を継続的に明らかにするのは、清末においては、漢文史料、欧文史料を問わず、他の史料ではおそらく不可能である。

ところが、これまでのところ、これら近代宣教師の文献は、中国の社会および歴史の研究に十分に利用されているとはいいがたい。その原因としては、つぎの2点が考えられる。(1)史料としての有効性が十分に検証されていないこと。(2)文書自体が手書きのくずれた筆記体で書かれ、非西洋人にとっては判読がきわめて困難であること。

より古い時期に遡って1920年代の農民運

動を理解する手法は、MarksやGalbiatiといった欧米の研究者によってすでに先鞭がつけられ、またそれらの研究のなかで、キリスト教関連文書も部分的に使用されはじめていた。

しかしこれらの研究の主眼はやはり農民運動にあり、農民運動に直接関係していると思われる事項に限って、過去の事例が問題とされた。つまり、地域史そのものには本格的には踏み込んでいない。

本研究では、このような背景を踏まえ、1920年代の農民運動をも含めた地域史の全体像を明らかにしようとした。

2. 研究の目的

本研究は、欧米のプロテスタント宣教師が残した中国にかんする大量の文献資料を整理、分析することによって、中国の個別地域の歴史、とりわけ庶民の動向を考察しようとするものである。対象地域は、広東省東部の汕頭、潮州とその周辺部とし、対象時期は明の中、後期から1920年代末までとする。

さらに具体的には、研究の目的はつぎの2つに分かれる。

- (1)同文書によって、中国社会のより下層部分の実態を明らかにすること。なかでも、激しい生存競争のなかにおかれた住民の動きを解明しながら、地域史を再構築すること。
- (2)上記の作業を通して、ミッション関連文書の有用性とその限界を明らかにすること。

(2)について、すこし説明を補っておく。近代以降、中国にかんする歴史的史料が劇増し、なかでも中国と本格的に接触しはじめた諸外国による文書が目ざされる。そこには、中国語史料のみでは知ることのできないさまざまな事象が、しかも場合によっては詳細に記録され、歴史および社会史研究上きわめて有用であることは言うまでもない。これまでとりわけよく使用されてきたものとしては、イギリス外務省の外交史料をあげることができよう。

この資料はきわめて膨大、かつ検索のむずかしいものであるが、これまですでに多くの研究者が使用して研究成果が蓄積され、歴史史料としての有用性がかなり明らかになっている。

これにたいして宣教師関連文書の場合は、膨大な文書群が世界各地の図書館、文書館等に散らばっているうえに、そもそもそのなかにもどのような種類の文書が含まれているのかもはっきりしない(アメリカにかんしては、資料の所在目録が整備されつつある)。

さらに、そこにはどのようなことが記録され、または記録されていないのかも不明である。これにくわえて、記述の正確さも、なん

らかのかたちで検証されなければならない。本研究では、ミッション文書の、こうした歴史史料としての性格を、多少とも確認することもめざした。

3. 研究の方法

広東東部の汕頭、潮州周辺で、清末までに本格的な布教活動を展開したのは、プロテスタントではイギリス長老会とアメリカン・バプティストである。カトリックはフランスのパリ外国宣教会が入っていた。本報告者はフランス語を扱うことができないため、上記プロテスタント2団体の文書を、おもに整理、分析することになる。ただし、より布教範囲の広いイギリス長老会を、考察の中心とする。

イギリス長老会かんしては、その文書をマイクロフィッシュ化した Presbyterian Church of England Foreign Missions Archives, 1847-1950 を、以前に受けた科学研究費補助金で購入し、すでにいくつかの論考を公表してきている。今回あらたに、アメリカン・バプティストの文書もマイクロフィッシュで購入し、あわせて読みすすめた。

これらにくわえて、こうした文書には収録されない各種の雑誌も使用した。イギリス長老会の *The Presbyterian Messenger* や、アメリカン・バプティストの *Missionary Magazine* などである。

研究の手順としては、こうした文書や雑誌を読みすすめ、要点を日本語に訳し、そのまま単純にパソコンに入力する。そして、それらをひとつのファイルに統合する。現在のところ、こうして文字数約43万字の大きな文書ファイルができあがっている。これは、そのまま読んで前後にほとんど脈絡のない、雑多で断片的な記事の寄せ集めにすぎない。

このファイルをテキスト版データベースとみなして地名別に検索し、ヒットした記事を時代順に並べる。そうすると、それぞれの地域で、どのようなことが起こっていたのかが、ある程度明らかになる。つぎに、それぞれの地域を地図上で確認しながら、変動の様相をおおまかに把握する。また場合によっては地名以外のさまざまな項目を検索することもある。

このようにして得られた素材に、当時の中国人地方官が残した記録や、地方志類、また必要に応じて、イギリス外交史料、おなじくイギリスの議会文書、海関文書などをできるだけ組みこむ。このような方法で、順次、地域内の各時期の特徴を整理してゆく。これが基本的な方法である。

4. 研究成果

さきにも触れたように、本研究は、以前に受けた科学研究費補助金ですでに開始しているものである。そこで、とくに今回の研究

では、これまでに行った研究をすべて統合し、欠けている部分を補い、清末から1290年代にいたる地域史全体を描きだすことを目標とした。

その結果、構成はつぎのようなものとなった。

- 第一章 村落と械闘
- 第二章 西洋の到来
- 第三章 一八九三年
- 第四章 農民運動の勃興
- 第五章 武装闘争のゆくえ

以下、順に内容を紹介する。

(1)「第一章 村落と械闘」では、農村部の基本的構造を確認する。この地方では、宗族に率いられた同族村がなかば城塞化し、武力を擁し、近隣の村々と戦闘を繰り返していた。すくなくとも広東東部では、地域のこのような景観が成立したのは、明の中・後期以降だったと思われる。

そうした戦闘の際、とりわけ弱小村落が連合体を結成して、強大村落に対抗することがよく見られた。1854年の天地会の反乱を契機として、村落連合がさらに発展し、海豊、陸豊地域の場合、紅黒旗と呼ばれる2大党派が成立する。

このような自立性の高い村落は、互いに戦うだけでなく、地方官による犯人逮捕や租税徴収にも抵抗した。

(2)「第二章 西洋の到来」では、そのような特性をもつ地域のなかで、キリスト教の布教が始まったとき何が起こったのかを、検証する。その前提として、布教そのものがどのように進展したのかを見ると、それは、市場町をたどりながら奥地へと進み、それぞれの市場町を拠点として、さらに周辺へ展開するものだった。

そして入信者数を調べてみると、清末までに2回のピークが起こっていた。これは、地域になんらかの変動が2回起こったことを意味する。このうちの第1回目は、官吏による高圧的な治安回復作戦に起因していた。入信社はそこから身を守るために、教会を頼ったのである。これは結局、村落の連合体によって自分たちを守ろうとする住民の行動パターンと同質のものであり、この結果、教会も地域の紛争に巻き込まれることとなった。

(3)「第三章 一八九三年」では、第2回目の入信者数のピークを扱う。1893年末からふたたび信者が急増する。その直接の原因についてはよくわからないが、干ばつによる米不足に、日清戦争の影響、さらにコレラやペストの大流行などが重なり、住民を不安に陥れたためと考えられる。

住民が頼ろうとしたのは、教会だけではなかった。秘密結社が活動を活発化させ、また

仏教系の慈善結社が急成長する。そして、この慈善結社がまもなく排外化して、1900年に教会を襲撃した。これがこの地方での義和団事件である。

1893年未以来のこうした動向のなかで注目すべきは、少なくとも中層、上層の住民の場合、中国がまもなく崩壊するのではないかと考え、そのときに備えて外国の教会と関係を持つとしたことである。つまり、さまざまなものを利用して身を守るという行動パターンのなかから、地域の枠をこえて、中国を対象化する視点が現れている。

(4)「第四章 農民運動の勃興」では、20世紀前半における当該地域で最大の民衆運動となった農民運動について、そうしたものが形成されてくる要因および、その性格を明らかにする。

その際参考になるのは、教会の変化である。19世紀末から20世紀初頭にかけて、中国のキリスト教は歴史的な転換を遂げつつあった。個人の魂の救済というそれまでの目的に、社会事業という新しい任務が加わってきたのである。中国人信者の側も、従来は生活上の利益を得ることが入信のおもな目的だったが、YMCAの青年信者を中心として、社会および社会活動へと視野の広がりを見せはじめる。

農民運動はひとつにはこれと同様の、社会への意識、そしてそこに伝統的な互助組織によって身を守るという方式がいまって、発展したものと考えられる。

辛亥革命時には本地域でも三点会が活躍するが、革命成功後、革命の「分け前」を求めて奔放に振る舞った三点会は、革命の指導部によって弾圧され、消滅する。これは、社会への視点と自己利益との矛盾が、うまく調整されなかった結果だろう。

農民運動の場合は、共産党員の指導によってその矛盾が克服されるかに見えたが、しだいに黒い影が現れるようになる。問題点が2つあった。ひとつは、運動が在来の宗族主義と不可分の形で進まざるを得なかったこと。もうひとつは、広東全体の政治状況のなかで、急速に武力主義に陥っていったことである。

広東では、不安定な国民党政府のもと、省内の治安維持のために、民間武装に頼らざるを得ない側面があった。こうして地主側の武装と、農民運動側の武装が同時に奨励、育成され、両者の衝突を激化されることになる。

(5)「第五章 武装闘争のゆくえ」では、そのような武力衝突が、とくに本研究が主題とする広東東部でどのような方向に向かったのかを整理する。

それは一言で言って、報復の悪循環や凄惨な大量殺人をともなう破滅的なものであり、伝統的な村落間の戦闘をさらに深刻化させたものとかかわらなかつた。しかも、共産党の

方針が、一時期、それを推進してしまった。こうして広東の農民運動は、いわば前近代的なものに飲み込まれるような形で、終焉することとなる。

明の中、後期以降に自立性の強い独特な姿を取り始めた当該地方の社会は、19世紀末にいたって、重層的な不安要因のなかで、従来の村落や宗族とは若干切り離されたところで、互助運動を展開しはじめる。その頂点に位置するものが、1920年代の農民運動だったと考えられる。

しかしその運動は、伝統的要素になかば足をすくわれながら暴走し、政府軍によって殲滅させられる。こうして、19世紀末以来の運動が、終わりを告げることになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計1件)

蒲豊彦、近代中国の大量死と政治的暴力 広東東部地域を中心として、アジア政経学会(東日本大会) 2010年5月21日、北海道大学

〔図書〕(計2件)

蒲豊彦、他、平凡社、異文化交流史の再検討 日本近代の<経験>とその周辺、2011、300。担当部分は「キリスト教と近代中国社会 魂の救済から社会の救済へ」pp.181~212。

蒲豊彦、他、慶応義塾大学出版会、救国、動員、秩序 変革期中国の政治と社会、2010、310。担当部分は「近代広東の民衆組織と革命 匪賊的行動様式の観点から」pp.105~130。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

蒲豊彦 (KABA TOYOHIKO)

京都橘大学・文学部・教授

研究者番号：30233919